

平成29年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

元に戻った「馬頭観世音の道しるべ」

現在、車で出かける時は、カーナビゲーションで行く先を設定すると、女性のやさしい声で道のりを教えてくれます。声の通りに進めば目的地に到着できる、とても便利なシステムです。徒歩の人もスマートフォンで同じ機能を使って目的地に行くことができます。地図を見ながら出かけていた時代はひとむかし前となってしまいました。

では、江戸時代はどうだったのでしょうか。紙はとても貴重で、村絵図などはありませんでしたが、携帯するものではありませんでした。人々が遠くに出かける時に、目印となったものは、街道の所々にある「一里塚」と呼ばれる木の植えられた塚や「道しるべ」でした。「道しるべ」は人々が迷わないように、動かないような重い石に矢印や文字が彫られ、道の分岐点などに据えられていました。

青梅宿から東方へ向かう場合、出発するとまず師岡の追分の「道しるべ」に行き当たります。江戸へ向かう人は「右 江戸道」と彫られた右手の道を通って新町経由で江戸に行きます。川越、所沢、扇町屋、飯能へ向かう人は「左飯能、川越道」と彫られた左手へ折れて、1kmほどで野上の一本檜にたどりつきます。ここで、道は二つに分かれ、分岐点にはヒノキが植えられていました。

ご紹介する「馬頭観世音の道しるべ」は、文政12（1829）年4月に野上村の人々によって、ヒノキの根元に建てられました（写真－1）。高さ約60cm、横45cmの自然石に、「馬頭観世音」と大きく刻んであります。街道の牛馬の安全を願って馬頭観世音を祀りました。そして右側に「向 右 あふぎ町や かわごへ 左 はんのふ ちゝぶ、みち」と彫られています。

右側の道は霞川の南側台地を一直線に、川を越えずに扇町屋へ、またその先の川越へ続いていました。江戸時代から米や麦の値段は扇町屋で決められており、物資の流通上、青梅と扇町屋を結ぶ重要な役目がこの道にはありました。

左側の道は、大門、今寺、今井の七日市場から「根通り」



写真－1 馬頭観世音

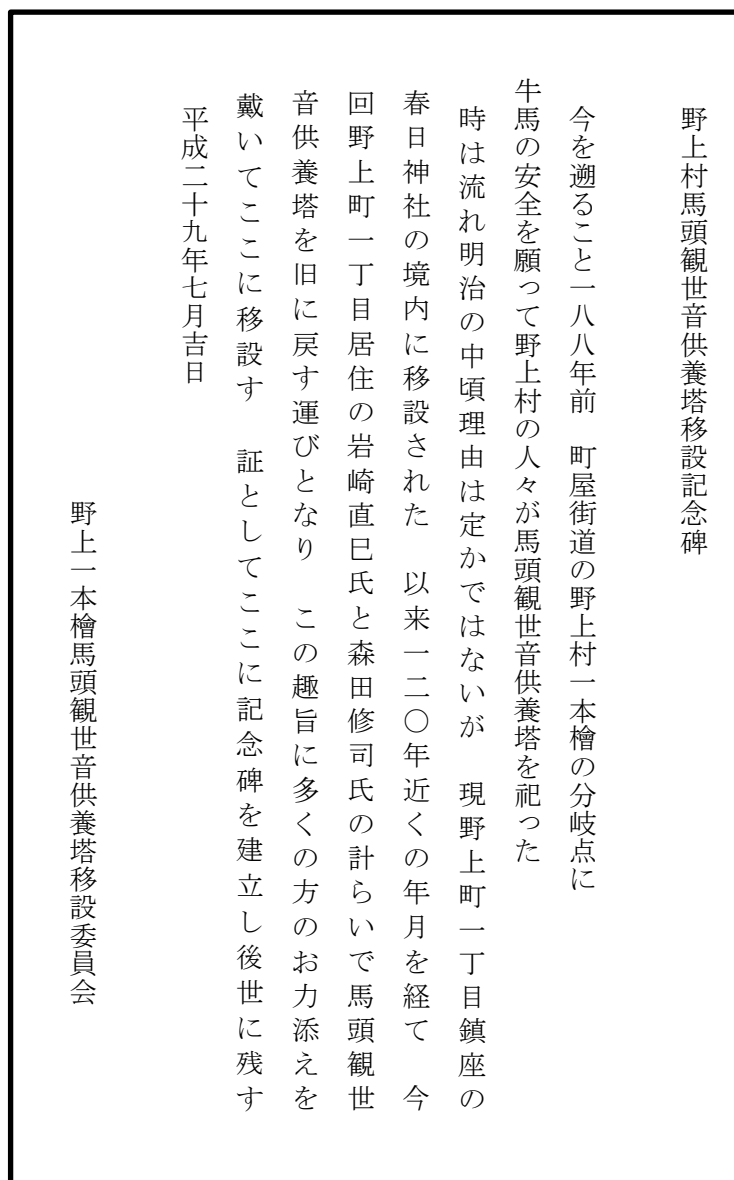
と言われる入間市木蓮寺、峰を通り飯能、秩父へ通じていました。

しかし、明治時代になり、この「馬頭観世音の道しるべ」は野上町一丁目の春日神社の境内に移されました。

その後、野上一本檜の「馬頭観世音の道しるべ」は「道しるべ」としての仕事を長い間休んでいましたが、今回「野上一本檜馬頭観世音供養塔移設委員会」の皆さんと地元の人々のご尽力により、春日神社から元の場所に戻りました。

7月2日には多くの方が参列して、移設竣工祭が盛大に執り行われました。石碑の隣には、立派な記念碑も建立されました。

記念碑には次のような文言が刻んであります。



「馬頭観世音の道しるべ」は120年ぶりに、様々な車がひっきりなしに行き交う道の分岐に建ち、交通安全を願っているにちがいありません。

(文責 小島みどり)